

イメージ図

前年の大運動会の収支報告によると賞品費が予算の3分の1強、現在の金額にして50万円以上を占めていたこと、市内の商店などから寄付を集めていたことを考えると、この余興の賞品も学徒にとっては、なかなかの高級品であったと思われる。実際、この旨い話に目の眩んだ参加者は、竿に群がり、いち早く賞品を手に入れようと我さきにと登り始めたようだ。

しかしながら、そこは余興。威勢よく登っていった者たちは、なぜかあと一歩のところで手が届かず、竿をすべり落ちてしまう。実は、竿の先には、ぬるぬるとした豚の脂が塗られており、多くの参加者はこの仕掛けにとらわれ、豪華賞品を目前に脱落を余儀なくされたようである。

当時まだ珍しかった大運動会には、市内外から近所の子供達を含む多くの見学者が 詰めかけていたようだが、滑る竿に懸命にしがみつく姿に場内は盛り上がり、ついに賞品 を手に入れた者は、大きな喝采を浴びたようである。新緑の岡山城下で汗する学徒達の 姿を見ることは、見学者達にとっても、戦争により重苦しくなっていたであろう時代の空気 を忘れられる、ひとときの休息となったのではなかろうか。

競技順序67番 4年級余興「発火演習」

ときは明治 37(1904) 年5月。2月に始まった日露戦争のさなか。 富国強兵策のもと10年前の日清戦争で台湾、遼東半島などを奪い、 さらに当時の国家予算の2倍強もの戦時賠償金を日本は清国から手 にしていた。その勢いのままさらに朝鮮半島、満州の利権をロシアと 争うこの攻防の重要地点が遼東半島先端の旅順要塞であった。『烏 城』39号によれば、そこを陸軍と海軍陸戦隊に扮した4年級が攻略 するという筋書きの余興であったらしい。運動会の開会・閉会は大 砲の発砲(空砲)で告げられ、競技は小銃の発砲(空砲)でスタートしていた。時代に相応した余興であったようだ。



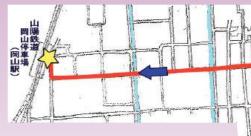
明治33年(1900)の発火演習の記念写真

激しい戦闘の後、死傷者多数ながら勝利し、死傷者、兵器が散

乱する惨状の中で観兵式を行ったという見立てで余興は終わり、運動場を1周して引き上げた。海軍陸戦隊に模してお濠に端艇(ボート)も浮かべたようだ。実際の戦闘はこの余興の7か月後まで続き、双方で3万人以上の人命が失われたとある。戦争で他国の領土と賠償金を奪うことが「正義」であった時代、岡中生の多くもそれを疑うことはなかったかもしれない。それから40年戦争に明け暮れ、甚大な加害と被害の傷跡を歴史に刻むことになる。運動会は平和と友好の祭りであってほしい。

番外編 提灯行列

午後6時から、運動会の 準備と運営に尽力した5年 級の生徒と教員との慰労会 が講堂で、立食パーティー形 式で開かれたが、慰労会後 の様子が『烏城』39号に 次のように書かれている。



『会終えて本校先生の提灯行列を催しぬ 楽隊を先に立てて無数の提 灯は軍歌の声勇ましく 相生橋を渡って小橋町に出で 本通りを経てス テーションに至り 君が代を高唱して別れぬ』

夜の8時から9時頃、わざわざ相生橋を渡り、かなりの遠回りをしながら、楽隊を先頭にズンチャカズンチャカと駅まで提灯行列とは! 当時、先生と5年級の生徒で100人近くはいたのではないだろうか。この頃、岡中の運動会がある意味「祭事」であり、現代のスポーツ観戦的要素もあり、市民もきっと大目にみていたのだろう。

